

重いものを受け渡す際の掛け声「もらった」の相互行為上の機能 Interactional Function of Chant "moratta" in Passing Heavy Objects

阿部 廣二[†]

Koji Abe

[†]早稲田大学

Waseda University

koji.abe03@gmail.com

概要

本論では、重いものを受け渡す際に産出される「もらった」という掛け声の相互行為上の機能を検討することを目的として、祭りの準備過程における「ぼや」の受け渡し場面を分析した。その結果、第一にぼやの担い手が二番手に移ったことを示すこと、第二に受け渡しのやり方を理解したことを示すこと、第三に三番手に受け渡し開始を予示すること、第四に活動のリズムを作ることといった相互行為上の機能がある可能性を示唆した。

キーワード：重いものの受け渡し (passing heavy objects), 相互行為 (interaction), 掛け声 (chant), もらった (moratta)

1. 目的

本研究では、重いものの受け渡しの際に受け手によって産出される「もらった」という掛け声の相互行為上の機能について分析を行う。

ものの受け渡しの相互行為に関する認知科学的な先行研究として門田他がある^[1]。この研究では、相互行為分析の立場から日常的なものの受け渡し場面を分析し、受け渡される物への限定的なアクセスを示すことによって、受け渡しの依頼が組織されることを例証している^[1]。しかし、門田他が分析しているのは、鍋料理で使うごまだれなど、比較的軽いものの受け渡しであった^[1]。本研究では、より重いものの受け渡しを分析対象とする。

また、重いものの受け渡しにおいてしばしば産出される掛け声として、「もらった」がある。本研究が分析対象としている長野県野沢温泉道祖神祭の準備過程^[2]でもしばしば観察される掛け声である。本論では、重いものの受け渡しにおけるこの「もらった」の相互行為上の機能について分析を行う。

2. 方法

分析データとして、2022年10月に撮影された長野県野沢温泉村道祖神祭の準備過程における、「ぼや」と呼ばれる資材の受け渡し場面を用いる。ぼやとは、

祭りの社殿づくりに使用される、木の枝を複数本まとめて縄で留めた資材であり、山で伐採された枝を用いて作成される。ぼやは10月の御神木伐採の際に、山から祭り会場周辺まで降ろす。本研究では、祭り準備を行う者たちが、ぼやを山の斜面からバケツリレー形式で軽トラックまで運ぶ作業に焦点を当てる。

ぼやは長さ1m~2m程度と長く (figure 1)、正確な重さはわからないが、かなり重い。また、山の斜面に置いてあり、受け渡しには危険が伴う。その一方、祭りの準備は日が暮れる前には終わらせなければならない。ゆえに、ぼやの運搬には、安全にぼやを受け渡すことと、早く作業を終わらせることの間のジレンマがある。



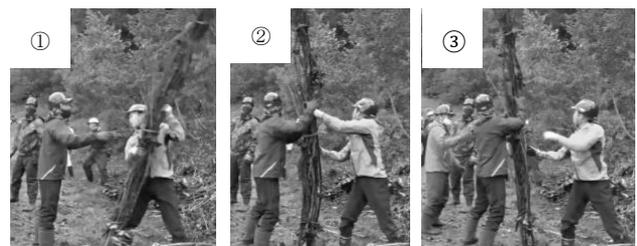
Figure1 ぼや

こうした状況において準備者たちが産出する「もらった」は、相互行為を適切に進行させる上で、どのような機能を持つのだろうか。この問いをリサーチクエストとし、相互行為分析の手法を参照しながら、上記の映像を分析した。なお、最初の渡し手を「一番手」、その受け手を「二番手」、そして二番手が渡し手となった際の受け手を「三番手」と呼ぶ。

3. 分析

3.1 受け渡しの基本的な連鎖構造

ぼやの受け渡しには、一番手がぼやを渡しながら「はい」と言い、二番手が「はいもらった」と言いながらぼやを受け取るという連鎖構造がある。Figure2では、①



「はい」

「はいもらった」

Figure 2 「はい-はいもらった」連鎖

において一番手がぼやを持ち上げながら「はい」と発話しながらぼやを二番手側に倒し、その後、②において、二番手が「はいもらった」と発話している。こうした連鎖構造が、相互行為上、どのような機能を持つのか、以下事例を抜粋しながら検証する。

3.2 「はいもらった」の相互行為上の機能

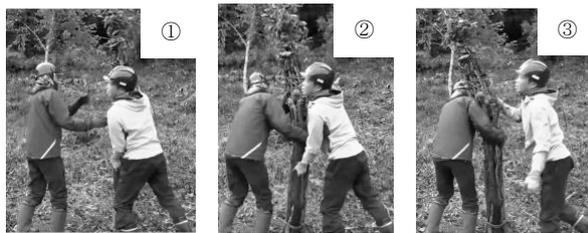
3.2.1 ぼやの担い手が二番手に移ったことを示す

第一に、「はいもらった」という掛け声には、ぼやに対して力を入れ重さを支えている担い手が、確実に二番手に移ったことを示す機能があると考えられる。

Figure2の事例では、一番手が「はい」という掛け声とともにぼやを二番手側に倒し、二番手がそのぼやをしっかり掴んで力を入れたタイミングで、「はいもらった」という掛け声を産出している。そして、一番手はこの掛け声を十分聞いた後の位置においてぼやから手を離している。ぼやに対してどちらも力を入れない状態が生じた場合、ぼやを支えるものが一時的に不在となり、倒れる危険性がある。ゆえに、「もらった」を通して、確実に二番手がぼやを支えている状態を作り出し、上記の危険性を低減させているといえよう。

3.2.2 受け渡しのやり方を理解したことを示す

しかしながら、二番手が力を入れるよりも明らかに前に、「もらった」という掛け声を産出する事例も観察されている。



「はい」 「はいもらった」

Figure 3 「はいもらった」が早めに産出される事例

Figure 3の事例では、①にて一番手が「はい」とぼやを差し出している。このとき、一番手はすこしぼやを持ち上げ、勢いをつけている。二番手が「はいもらった」を発話したのは、この一番手がぼやを持ち上げ、勢いをつけて差し出した段階である(②)。②の画像の段階では、一番手は勢いをつけるためにぼやをしっかり握っており、十分に力を入れているように見える。また、二番手はぼやに手を伸ばしてはいるものの、力を入れているようには見えない。ゆえに、ぼやの重さを支えている担い手が移動したわけではない位置で

「はいもらった」が産出され始めているといえる。

このような「はいもらった」の掛け声には、一番手が今後行おうとしている受け渡しのやり方を理解したことを、担い手が二番手に移るよりも前に示す機能があると考えられる。一番手の受け渡しのやり方を二番手が理解できれば、ぼやの重さを支えている担い手が移ったことを確認するよりも前に、一番手は二番手にぼやを任せることができる。こうすることで、重心の変化を一つ一つ確認することなく受け渡しを行うことができ、効率よく作業を進めることができるといえよう。Figure3の事例でいえば、一番手が勢いをつけて受け渡そうとしていることを二番手が理解したことを示し、重さの支えが移る前に「はいもらった」を産出することで、一番手が迅速に次の作業へと移っている。事実、一番手は、まだ受け渡したぼやを手で支えている段階から視線を遠方の参加者に向け、呼びかけを行っている(③)。この振る舞いから、現在は二番手がぼやの重さを支えており、現在の受け渡し作業に専念する必要がないと一番手が理解していたといえよう。

関連して、「もらった」の掛け声が、「もら-った」のように、発話内休止される事例があった。



「はいもら-った」

Figure 4 発話内休止事例

Figure4の事例では、まず一番手がぼや上部に左手をかけ、上部を倒す形でぼやをうけわたそうとしている(①)。同時に、二番手はこの受け渡しのやり方を予測し、ぼやの下部へと手を伸ばし始め、「はいもらった」の発話を開始している。しかし、その発話の直前、一番手はぼやの下部へと手を移している。この手の移動を通して、一番手がぼやの受け渡しのやり方を変更したことを示しているといえよう。ここでのぼやの受け渡しは、少なくとも2つのやり方がある。第一にぼやを①の地点から前に倒し二番手に受け止めてもらう方法、第二にぼやを下部から持ち上げ、勢いをつけて受け渡す方法である。第一のやり方はfigure 2の事例に、第二のやり方はfigure3の事例に類似している。ここで一番手は、ぼやの下部へと手を移すことで、第一のや

り方から、第二のやり方へと方法を変更したことを示しているといえよう。

この方法の変更に、二番手は敏感に反応しているように見える。まず、一番手が上部から下部へと手を移動させたことを受け、二番手は下部に伸ばそうとしていた腕を、上部へと進路変更している。次に、一番手が手をぼや下部へと移動させたことを確認できる位置において、二番手は「もら-」と発話を休止している(②)。この位置は、一番手による方法の変更が確認できる位置である。すなわち、二番手はやり方が変更され、予測が困難になったことを受け、一旦発話を休止したといえる。そしてその後、一番手がぼやを持ち上げ、勢いをつけてぼやを差し出し始めた位置において、「-た!!!」と休止していた発話を再開している。この位置は、一番手によって新たなやり方が示された位置である。すなわち、二番手は、新たなやり方の予測ができた位置において、休止していた発話を再開したといえよう。

Figure 3 および Figure 4 の事例では、二番手は、「はいもらった」の掛け声を通して、一番手の受け渡しのやり方を予測・理解したことを示し、円滑に受け渡しを組織しようとしていたといえる。したがって、「はいもらった」の掛け声には、重さを支えている担い手の変化のみならず、一番手の受け渡し方法を理解し、問題なく自らが担い手になれることをも示す機能があるといえよう。

3.2.3 一番手が受け渡しのやり方を示すために利用可能な資源

これまでの分析と関連して、一番手が、受け渡しのやり方を示すためにどのような資源を利用していたのかについて分析する。

第一に受け渡しのやり方を示すために利用可能な資源は、掛け声である。Figure 2, 3 の事例からもわかるように、一番手の「はい」という掛け声は、二番手に対し、その後受け渡しが行われることを示すといえる。さらに、掛け声は、一番手が把持しているぼやが、問題なく受け渡し可能であることをも示していると考えられる。

示唆的な事例として、一番手による「はい」の掛け声がない事例がある。Figure 5 では、一番手が「はい」の掛け声を産出せず、二番手が「はいもらった」と発話している。この事例では、一番手が持ち上げたぼやがどうやら相当重いらしく、二番手は、一番手の持つぼやを迎えに行く形で受け渡しを行っている。こうし



「はいもらった」

「重いよ!!!」

Figure 5 一番手の「はい」がない事例

た事例から、一番手による「はい」が産出されない場合は、ぼやの受け渡し方法を選べないこと、すなわち何らかの困難が生じたことが示されるといえよう。事実、受け渡しの直後、一番手は②の画像の位置で、「重いよ!!!」と、上記の困難が、ぼやの重さであることを示している。これらのことから、掛け声「はい」を通して、今後受け渡しが行われること、および現在把持しているぼやは問題なく受け渡せることを示せるといえよう。そして、「はい」掛け声がない場合、受け渡しを行う上で何らかの困難が生じていることが示されるといえよう。なお、Figure 4 で示した事例においても、「はい」の掛け声が産出されていないが、ここでも受け渡し上の困難（どの方法で渡すべきか）が生じている。

さらに、一番手の「はい」の掛け声、および二番手の「はいもらった」の掛け声がない事例も見られた。このような場合、二番手でも解決できない困難が生じたことが示され、三番手以降の担い手もこの困難の解決に動員される様子が見られた。



Figure 6 一番手の「はい」および二番手の「はいもらった」がない事例

Figure 6 の事例では、一番手がぼやに手を伸ばしたところ、重すぎて一人では持ち上げられなかった(①)。そこで二番手が手を出そうとするが、二番手も特に掛け声を産出していない。その様子を見て、三番手および四番手の担い手が援助に駆けつけている(②)。

第二の受け渡しのやり方を示すために利用可能な資源は、ぼやの持ち方である。Figure 3 で示した事例では、一番手がぼやの上部を持つのか下部を持つのかによって、受け渡しの方法が異なると二番手に理解されていた。それゆえ、持ち方は、受け渡しのやり方を示す際

に利用可能な資源でもあるといえる。

第三に受け渡しのために利用可能な資源は、ぼやが移動する方向である。Figure 1 で示した事例では、一番手はぼやの先端が置かれている場所を支点として、二番手の左側へとぼやを倒し始めている。そして、このぼやの移動を受けて、二番手は立位および右肩でぼやを受け止めている。一方、Figure 2 で示した事例では、一番手がぼやを持ち上げ、勢いをつけて二番手に差し出している。このぼやの移動と勢いを受けて、二番手に、すこし腰をかがめて重心を低くし、静止しながら受け止めている。ゆえに、ぼやが移動する方向によって、二番手が受け取るやり方を変えているといえよう。このように、ぼやの移動する方向は、受け渡しのやり方を示す資源の一つであるといえる。

3.2.4 三番手に受け渡し開始を予告する、および活動のリズムを作る

さらに、「はいもらった」という掛け声には、次の渡し手に対して、受け渡しの開始を予告する機能があると考えられる。これまでの分析から、「はいもらった」という掛け声が産出されれば、二番手にぼやの管理が移ったことを示すといえる。また、受け渡しは、ぼやを軽トラックのそばに置くまで続く。それゆえに、直前の受け渡しが完了すれば、つづく三番手に対する受け渡しを開始されることを予告できる。事実、Figure 1 の③において、二番手は「はいもらった」という掛け声を産出しながら、三番手のほうへと視線を向けている。また、一番手の「はい」や二番手の「はいもらった」を受けて、三番手は二番手が持つぼやへと手を伸ばし始めている。

最後に、「はいもらった」には、活動のリズムを作る機能があると考えられる。ぼやは、いわゆるバケツリレー方式で運ばれている。それゆえ、ぼやの受け渡しは、ぼやを軽トラックのそばに置くまで継続することになる。フィールドでは、「はい」「はいもらった」という掛け声が一定間隔で産出され、小気味よくぼやが運ばれていく。「もらった」には、こうした活動のリズミックな構造を作る機能があるといえる。

4. 考察

本論では、重いものを受け渡す際に産出される「もらった」という掛け声の相互行為上の機能について検討することを目的として、祭りの準備過程における「ぼ

や」の受け渡し場面の分析を行った。その結果、第一にぼやの担い手が二番手に移ったことを示すこと、第二に受け渡しのやり方を理解したことを示すこと、第三に三番手に受け渡し開始を予告すること、第四に活動のリズムを作ることといった相互行為上の機能がある可能性を示唆した。

上記の相互行為上の機能には以下のような序列があるように思われる。まず、第二の機能として指摘した、二番手が受け渡しのやり方を理解したことを示すための「はいもらった」は、一番手が困難なく受け渡しを開始していること、および二番手が一番手の受け渡しのやり方を理解できていることから、受け渡しに際して、受け手/渡し手ともに困難がないと考えている場合に優先して用いられると考えられる。次に、受け渡しに際して、持ち方や渡す際の向きなどから、受け手である二番手が受け渡しに何らかの困難（ぼやが重い、受け渡しに勢いがあるなど）があると判断した場合、第一の機能として指摘した確実にぼやの重さの担い手が移ったことを示す「はいもらった」が用いられると考えられる。さらに、一番手が何らかの困難があると判断した場合、一番手は掛け声「はい」を産出しない。この場合、二番手がこの困難を解決できる場合は「はいもらった」という掛け声により受け渡しを行う。また、二番手も解決が難しいと判断した場合、「はいもらった」を産出しない。そして、一番手・二番手とも掛け声を産出しないことで、掛け声によって作り出されていた活動のリズムが停止する。このことを通して他のメンバーも現在生じている困難に気づき、援助を行う。こうして受け渡しのやり方に序列を作ることにより、冒頭で示した安全かつ迅速にぼやを運ぶというジレンマを解消していたように思われる。

今回の分析は、特定の一番手・二番手・三番手のみを対象としており、得られた知見は仮説に留まる。祭りの準備では、しばしばこの「はい」「はいもらった」連鎖が観察されるため、他の準備担当者の事例分析から上記の仮説を検証することを今後の課題としたい。

文献

- [1] 門田圭祐・牧野遼作・古山宣洋, (2019) “物への限定的なアクセスの表示による渡すことの引き出し：物の受け渡しにおける相互行為の微視的分析”, 質的心理学研究, 19(1), pp.26-45.
- [2] 榎本美香・伝康晴, (2015) “フィールドに出た言語行為論：「指令」の事前条件達成における相互行為性・同時並行性・状況依存性”, 認知科学, 22(2), pp.254-267.